
バカとイレギュラーと奇知外

紫炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとイレギュラーと奇知外

【Nコード】

N6047X

【作者名】

紫炎

【あらすじ】

神崎直人という転生者が『バカとテストと召喚獣』の世界に舞い降りた。彼は坂本雄二らFクラスの面々と共に愉快に高校生活を送っていく……………

それだけならよかったのに転生者というイレギュラーを世界は認めなかった。世界はそのイレギュラーを迎えてしまった反動を物語の主人公『吉井明久』に与えた。それによって本来あり得ない人物に出会ってしまった吉井明久はどんな結末を迎えるのか。

これはイレギュラーによって歪んでしまった吉井明久を中心とした

物語である。

この作品では明久は元の性格がありません。非人道的な発言も目立ちます。

プロローグ（前書き）

最終警告ですが元の吉井明久君はいません。

それでもいいならどうぞ。

プロローグ

俺の名は神崎直人。俺は今謎の空間にいる。辺り一面真っ白で目の前でじいさんが土下座している。こんな展開を俺は知っている。確か二時小説サイトで読んだ……

「すまん！ わしの管理ミスでおぬしを死なせてしまった！」

そっだ、転生のパターンの一つだ。ということは……

「お詫びにと言ってはなんだがお主を転生させようと思う。どうじや？」

やっぱりか。でもまあ、転生にはあこがれていた部分があるから、是非ともさせてもらおう。

「じゃあ、転生先は『バカとテストと召喚獣』の世界で、能力とかは……」

転生先と付加能力の希望を言っていく中でこれからの生活を思い描いて、俺は楽しみで仕方がなかった。

世界にとって転生者は有害である

それは神の加護によって守られているからだ

その世界の生命の輪廻はその『世界』によって回っている

世界によって生命は調整され、世界によって守られている

神の加護を得た転生者には世界の意志は通用しない

故に障害が生じてしまう

その障害は悪ければ、世界を殺す

故に自己防衛のために世界は『主人公』にその障害を押しつけ、清算する

これが一つのイレギュラーに対する反動である

この世界も例外ではなく

その影響は主人公にもたらされる

1人の少年が公園のブランコに跨って泣いていた。1人寂しく、脇目もふらずに泣いていた。そこに1人の男性が近づく。

「どうしたんだい、君」

その男性はしゃがみ込み、少年に問いかける。すると、少年は泣きっぱなしの顔を男性に向けて、

「みんな、僕のこと『バカ』ってよぶの」

と悲鳴を上げるかのように言った。

「『バカ』？」

「うん」

男性は少年の言葉に返事をした。

「お父さんも、お母さんも、お姉ちゃんも、学校の先生も、クラスみんなも、おじさんも、おばさんも、みんな、みんな、僕のことを『バカ』って言うの」

少年は今まで我慢していたものを吐き出すかのように言葉を続けた。
「一生懸命がんばっているのに、いつもダメなほうにいつて『バカだ』って言われるの。テストでもいい点取れなくて、お父さんとお母さんに怒られて、お姉ちゃんにも『バカな弟』って言われるの」

一通り少年が言い終わった後、男性を見て

「どうしてなの、お兄さん？」

目に涙をためて目の前の男性に尋ねてみた。男性は少し悩んで、

「私にはわからないなあ」

と言った。少年は明らかに落胆して「そうなんだ………」と呟く。

「ただ………」

男性は少年を興味深そうに見つめて、

「私は君に大変興味を持ったよ」

男性は少年に手を差し伸べて、

「君を『研究』させてくれないか？」

と誘った。

「？ 研究すればわかるの？」

少年は首をかしげて尋ねる。

「ああ、私が解明してみよう」

自信満々に男性は言い放った。少年はその姿に魅了され

「うん！ よろしくね！」

男性の手を握った。

この出会いがこの少年の運命を大きくねじ曲げる。

これがたった1人の少年に興味をそそられた科学者「ジュエル・ス
カリエッティ」とその科学者に魅了され、親しい人間にバカにされ
続けた純粹無垢な少年「吉井明久」の出会いであり、この物語の始
まりである。

プロローグ（後書き）

この出会いが明久に何をもたらすのか。

転生者にどんな運命が待ち受けるか。

次回をお楽しみください。

第1話：はじまり（前書き）

年月が過ぎ、彼らは文月学園の二度目の春を迎える。

第1話：はじまり」

季節は春……

文月学園は何度目かの春を迎えた。登校道には桜が咲き、花びらが舞っていた。多くの学生が新たな気持ちで登校していく中、1人だけくるくると歌いながら歩いている生徒が居た。

「~~~~」

周りの人たちは彼に奇異の視線を寄せるが、寄せられている本人はもろともせずに進んでいた。

「~~~~」

周りのことなど関係なしに回り歩き、すごく楽しそうに歌っていた。前を見て歩け、吉井」

「~~~~」 おっ、西鉄先生、おっはようございます」

正門の前で待ちかまえていた教師に呼び止められ、回るのをやめた。呼び止められた生徒の名は吉井明久。栗色の髪の色をしていて後ろまで伸びている髪を三つ編みにして纏めているのが彼の特徴。しかも、制服の上には白衣を着ていて明らかに風紀違反をしている生徒だ。

「西鉄先生ではない、西村だ。これで何回目だ？」

「392回目ですよ。おめでとうございます、もうすぐ400回目ですね」

「そんなこと数えなくていい。全く」

ため息を吐きながら西村先生は近くの箱を探り始めた。

この教師の名は西村宗一。文月学園が誇る最終兵器である。というのは誇張表現で、彼は主に補習授業担当の教師である。趣味はトライアスロン、補習は鬼の補習という二つの要素が重なり、主な生徒は彼のことを恐れている。

箱の中から吉井明久と書かれた封筒を取り出して、明久に渡す。

「なんですか、この封筒は？」

「この前の振り分け試験の結果だ。3学期が終わる前に言っていたら？」

「ああ、それですか。興味ないから覚えていませんよ」

「おまえはなあ……」

明久は封筒を開けようとする。そこに西村先生が

「あー、吉井。今だから言うがな、去年一年間のお前を見て、『こいつはもしかしたらものすごいバカなんじゃないのか』という疑いを持ったんだ」

「それは心外ですよ、西鉄先生♪ そんなわけないに決まっているでしょ♪」

封筒の口が取れず、ハサミを取り出して、口を切っていく。

「そうだな、先生が間違っていたよ……」

封筒の口を綺麗に切った後、中身を取り出し確認する。

「吉井、お前の疑いはなくなった」

吉井明久 Fクラス

「お前はとんだ奇知外だ！」

はにや？ と疑問詞を浮かべる吉井に西村先生は原因を言う。

「お前、全問題、理解不能な数式をびつしりと埋めていただけじゃないか。そんなんじゃ0点になるのも当然だ」

「そうですか？ あれは回答を数式化しただけですよ？」

「科目一つ一つには、その科目の答え方がある。それに則ってやらなければいくら知識があっても、意味がないぞ」

「世知辛い世の中だなあ」

対して気にも留めた様子もなく、再び明久は歌い回りながら歩いていく。

「あつ、待て！ まだ話は終わってないぞ！」

「~~~~~♪」

西村先生の制止も聞かず、明久は校舎に向かっていく。西村先生は

止めるのを諦めた。

「まあ、Fクラスにはアイツが居るから大丈夫だろう……」
そろそろ登校時間も終わりにかけているのを見て、残っている封筒を
確認した。その中にある名前を見て本日二度目のため息をついた。

神崎 直人

第1話：はじまり♪（後書き）

続いてFクラスです。

西村先生が言った『アイツ』とは・・・・・・・・？

第2話：Fクラス（前書き）

今回は三人の視点から、話が進みます。

では、どうぞ。

第2話：Fクラス

神崎 side

今年、俺は文月学園で二度目の春を迎えることになる。とうとう原作のスタートだ。普通の奴ならここでAクラスかFクラスを選ぶだろう。だが、俺はそんなことはしない。原作キャラに関わるとロクな目に遭わないからだ。坂本の策略しかり、土屋の盗撮しかり、FF団の嫉妬攻撃と痛い目にしか遭わない。去年は同じクラスだったため、どうしても仲良くなるしかなかったが、体験してみて分かった。

凡人が過ごすような日々じゃない。特に吉井明久！ どういう訳かキャラが改変している。それも悪い方向に。何度、あいつに関わりたくないと思っただか。

一年間アイツらに付き合っただ俺を、ほめてやりたいと思ったぐらいだ。だから、今回はEクラスあたりを狙って、振り分け試験に臨んだ。手応えではいい感じだと思う。その安心のせいで、

「神崎！ 遅刻だぞ！」

遅刻したわけだが。

「おはようございます、西村先生」

「おはよう、神崎。それと一言足りないぞ」

一言足りない？ ああ、そうか。

「今日も朝から暑苦しいですね」

「遅刻の謝罪もできんのか、お前は」

うん？ そっちだったか。

「まあいい。ほれ」

西村先生が箱の方に手を伸ばし、封筒を掴んで、俺に渡してきた。とうとう来たなこの時が。俺はにわかに緊張する。

「あー、神崎。今だから言うがな、俺は去年一年間のお前を見て、『もしかしたらコイツバカなんじゃないか』という疑いを持ったん

だ……」

「それは大いなる間違いですよ、西村先生」

封筒の口が取れにくくて悪戦苦闘する。くそつ、これぐらい……。

「そうだな、今回の振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気付いたよ……」

「そう思ってくれるなら、嬉しいですよ」

こうなったら、破いて開けるか。

「喜べ、神崎。お前への疑いは消えた……」

封筒を破いて、中の紙を取り出す。さて、俺のクラスは……

「お前は馬鹿者だ！」

神崎 直人 Fクラス

「そんなバカな……！」

俺の最低クラスの生活が始まった。

明久 side

「おや、これがFクラスの外見か。ひどいねぇ」

歌いながら回り歩いていたら、いつの間にかFクラスに到達した。まず最初に目に付くのは、表札がダンボールで出来ているところ、壁が割れているところだ。長い間、放置されていたんだね。別にどうでも良かったので、教室に入ることにする。

「やあやあ、みんな。おはよう」モ「言わせねえぞ、明久！」

誰だよ？ 人の言葉に被せてきたのは。声の方を見ると、

「おや、坂下君じゃないか」おっはよう

「ああ、おはよう。それと俺は坂本だ。何回目だ、この会話」

「今ので2992回目だね」おめでと」もうすぐ3000回目だよ」

「そんなこと数えなくていい。暇人か、お前は」

思った通り、坂下君ではないか」 僕の…一号」

「坂下君が教壇にいるということは、君が代表？」

「坂本な。ああ、そうだ。俺がこのクラスの代表だ」

なるほど、なるほど。つまり、このクラスは坂下君の意のままに動くと言うことか。じゃあ、今後のプランは大幅に変更だね」

「席は自由だつてよ」

「じゃあ、僕は隅っこに座らしてもらおうよ」

楽しみだなあ、このクラスにはとてもいい“素材”が揃ってそうだからね」

雄二 side

相変わらずだな、アイツは。

「雄二よ。お主は吉井と親しいのかの？」

疑問を浮かべながら、一年の時から親友、秀吉が話しかけてきた。

「まあ、親しいっちゃあ、親しいな」

「よく付き合えるの、吉井と」

心底不思議そうな顔をして、秀吉が言う。まあ、当然か。

明久は高校一年の自己紹介の時に、余りにもぶっ飛んだ紹介と後の奇行で、寄ってくる奴は居なかったし、自分の興味を持ったことにしか、関心を寄せなかったからな。

そのせいで、友達なんて出来やしないし、文月学園『友達にしたいくないランキング』上位ベスト3入りしたからな。同級生だった奴らも薄気味悪がっていたから、余計にな。

「……正直、坂本の懐の大きさに感服する」

「そうじゃの。雄二よ、何かあったら、相談するのじゃぞ」
懐が大きいか……

「そんなんじゃねえよ……」

そんなんじゃないかねーだ。アイツと俺の関係は……

昔を思い出し、少し鬱になるが、もうすぐ来るであろう“バカ”を考えて、思考を切り替えた。と同時に

「すいませーん、遅れました」

とバカっぽい声が聞こえてきたので、俺は“バカ”で憂さを晴らしをする。

「早く座れ！ このウジ虫野郎！」

第2話：Fクラス（後書き）

どうでしたか？

雄二はこの小説の明久を知る上で、鍵となります。

今後の展開をどうやっていくか少し悩むところですが、ちゃんとした展開にしていこうと思います。

どうぞ、ご期待を

第3話：自己紹介（前書き）

今回は明久の爆弾発言。というよりこれを書きたかった。

第3話：自己紹介

神崎 side

「うわぁ、なんだこれは……」

鉄人こと西村先生にクラス分けの封筒をもらった俺は、今Fクラスの前に立っていた。そこで見た光景はライトノベルで読むよりもすごかった。表札がダンボールって……

「これが格差社会なんだな……」

先ほど見たAクラスと比べての落差が大きすぎて、嫌になる。だが、落ち込んでいてもしょうがない。いざ、Fクラス！俺は気持ちを切り替えて、新しい一歩を踏み出した。

「すいませ〜ん♪ 遅れました♪」

「早く座れ！ このウジ虫野郎！」

最悪だぁ！ 入って早々罵倒されるとは！ いや、待て神崎直人。もしかしたら聞き間違いかも知れない。

「聞こえないのか、アアン？」

聞き間違いじゃない。誰だと思い、声の方向を向いたら、

「……何やつているんだ、雄二」

「先生が来ないから教壇に立ってみた」

雄二が教壇に立っていた。そうか先ほどの罵倒は雄二だったのか。それなら理解できる。

「つか、何で教壇にいるんだよ」

「俺はクラス代表だからな。全員の顔を見回していたんだ」

「雄二が代表？」

「つまり、ここの奴らは全員俺の駒だ」

あくどい笑みを浮かべて俺を見る雄二。なるほど、原作通りなんだな、そこは。

「すみません、通してもらいますか？」

俺が雄二に話しかけようとしたとき、先生らしき人物が入ってきた。

この人が担任か。

「先生、席順はどうなっているんですか？」

「決まってないので、ご自由にどうぞ」

「決まってるのかよ!？」

手抜き過ぎだろ!？ 大丈夫か、このクラス!？

雄二side

HRが始まり、自己紹介に入る。ここの設備は散々なものだが、俺が考えるプランには丁度いい状態だ。あとはどのタイミングで仕掛けるか。

「すう」

俺の隣で寝息を立てながら寝ている明久を見た。コイツが協力してくれれば絶対に勝利は間違いないような気はするが、どうやってコイツを動かすか……。しょうがない、あの手で行くか。大体のプランをまとめて、どんな演説をしようか考えているとき、

「あ、あいつ。遅れてすみません……」

姫路瑞希が入ってきた。そういえば直人（バカ）が姫路について何か言っていたな。それが。

紹介が終わり、こちらに逃げるように来て、座った。後々のために話しかけとくか。

「ひめ「姫路」」

んっ？ 今なんか聞こえたような……。まあ、いいか。

「代表の坂本だ。よろしくな。」

「は、はい。よろしくお願いします」

挨拶も終わり、そういえばと気になることを聞いた。

「体調は大丈夫なのか？ 試験の時に体調を崩したと聞いたが……」

「あつ、俺も聞きたい」

「か、神崎君!？」

直人が話しかけてきた瞬間、姫路は大いに驚いていた。ああ、なるほど。

「姫路、直人がブサイクですまない」

直人に変わり、俺が謝罪しておいた。直人が何か言っているが無視だ、無視。

「そ、そんなこと、ありませんよ。顔は整っているし、目も開いていて……」

姫路が褒めるが、直人が褒められるのは気に入らん。

「確かに見てくれは悪くないかも知れないな。俺の知り合いも興味があるという奴も居たし」

「えっ、それって「それって誰ですか！」うおっ!？」

「確か、久保……」

よし、いい具合に食いついているな。ここで落としてやるか。

「利光だったか」

久保利光↓[♂]（男）

直人が落ち込んでいるのを見て、満足した俺はフォローをしてやることにした。

「安心しろ直人。半分冗談だ」

「待て、雄二。半分ってどういう事だ」

「そうですか、冗談ですか」

「ああ」

「雄二、半分ってどういう事だ!」

「こらこらそこ、騒がしいですよ」

「あ、すみません。せんせ……」

ゴシャァー……

騒がしくなった俺たちを注意するために、教壇をたたいた教師だったが、たたいた瞬間、音を立てて崩れ去った。

「……えー、替えを持ってくるので少々待っていてください」

教師が新しい教壇を取ってくるために教室を出た。

「……なあ、雄二。ちょっといいか」

「うん？ 何だ」

「ここじゃあ、話にくいからちよつと外で」

そう言つて、直人は俺を廊下に連れ出した。何だ、一体？

明久 side

「ふあ~~~~……」

丁度朝寝から目が覚めた。今後のプランの設計も終えたしね。楽しみだなあ〜♪

「吉井君、君の番ですよ」

おりよ？ もしかして自己紹介なのかな？ そうだ、みんなに言わなくちゃならないことがあるんだった。坂下君が「余計なことを言うなよ」みたいな視線を送る。大丈夫だよ、変な事なんて言わないから。みんなを見て、僕は自己紹介を始めた。

「おはよう、実験体（モルモット）諸君♪ 今日からみんなの体で実験と研究をしていくから、目立たないモブキャラのごとく、僕の実験台になつてね♪ よろしくおねがい、ね♪」

僕は特上の笑顔で言い切った。あれ、何でもみんな凍り付いたような表情をしているの？

第3話：自己紹介（後書き）

これを受けてのみんなの反応はいかに・・・？

次回をお楽しみに。

第4話：後戻りは出来ない

雄二 side

「おはよう、実験体（モルモット）諸君♪ 今日からみんなの体で実験と研究をしていくから、目立たないモブキャラのごとく、僕の実験台になってね♪ よろしくおねがい、ね♪」

あのバカ……。

直人の提案を廊下で聞き終えて、教室に戻り自己紹介が再開して明久の番になったとき、俺は後悔した。

そうだ。アイツの常識は普通の人に比べて、ぶっ飛んでいることを忘れていた。さっきのように言葉を被せれば良かった。

俺が心の中で後悔していると、止まった時間が動き出すかのようにFクラスの人間が猛反発した。

「ふざけんな！ 誰がモブキャラだ！？ 俺は主人公だ、ボケエ！」

「そうだ！ 大体モルモットだ！？ ふざけんじゃねえ！」

「俺たちはお前のために生きている訳じゃねえよ！」

「わしらのことをどんな目で見ているのじゃ！」

「そうよ！ バカにしないで！」

「帰れ、この野郎！」

ところ彼処から反発の声が上がる。うるさくてしょうがない。こうなるからちゃんと言えとアイコンタクトで言っただ。あんまりうるさいので黙らせようとした。

「うん♪ 元気があって結構だよ♪ でも、近所迷惑を考えようか。みんなの大好きな姫路さんが迷惑しているよ♪」

だが、それよりも先に明久が喋り、全員ハッと姫路に申し訳なさそうな視線を送った。姫路は「大丈夫です」と言っているが、少し顔色が悪そうだった。明久は言い終わっただけに座った。その後、全員が明久に対して、怒りを込めた視線を送るが、明久はそよ風のように受け流していた。

（おい、明久）

俺は注意するために話しかけることにした。

（うん？ なんだい、坂下君♪）

（坂本だ。他の人間から反感買ってどうするんだよ、お前は）

（人間？ 何言っているの？）

明久は笑顔を浮かべて言い放つ。

（僕の視線には坂下君以外、モルモットにしか見えないよ♪）

ゾクッ！！

笑顔で言い切る明久に、俺は久々に薄ら寒いものを感じた。

そうだ。コイツは一部を除いて『実験』と『研究』にしか興味が無い。だから、コイツの視線には俺以外は『実験素材』、要はモルモットにしか見えないのだ。ゆえに、人を人と思わない、とんだ奇知外いやそんな言葉では言い表せない『何か』なんだ。久々に実感したぜ……、長いつきあいだがコイツが時々出すこの『雰囲気』には一向に慣れない。

「えー、坂本君。君が最後ですよ」

呼びかけられて、もう最後なのかと気づく。ここは一気に空気を替えてやるか。俺は席を立ち、教壇に向かう。教壇にたどり着き、全員を見据えて自己紹介を始める。

「代表の坂本だ。代表とでも坂本とでも何なりと呼んでくれ」

全員がこちらに注目する。よし、いい感じだ。

「さて、みんなに一つ聞きたい」

俺は教室の各所を見る。

かび臭い教室

綿が入ってない座布団

足の折れた卓袱台

割れた窓

他の奴らも俺につられて見る。改めて見ると酷い有様だな。

「Aクラスは冷暖房完備の上に座席はリクライニングシートらしいが・・・」

ここで一拍おく。

「不満はないか？」

『大ありじゃあー！ー！！』

Fクラス男子、魂の叫び。つか、うるせえ。ここまで声をあげるとは思わなかった。

「いくら学費が安いからと言ってもこの設備はあんまりだ！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？　あまりにも差が大きすぎる！」

不満が爆発してところ彼処から不満の声が上がる。よし、いいぞ。これだけ不満があるならけっこうだ。

「だろう？　俺もこの現状に代表として大いに不安を抱えている」次の言葉を言った瞬間後戻りは出来ない。だが、上等。

「そこで代表としての提案だが・・・FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う！！」

やってやろうじゃねーか！

第4話：後戻りは出来ない（後書き）

次回、根拠の紹介です。

第5話：戦力分析（前書き）

長らく時間をおきました。

続きをどうぞ。

第5話：戦力分析

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- (1) 得意なことでも失敗してしまうこと
- (2) 悪いことがあったうえに、さらに悪いことが起きる喩え

姫路瑞希の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら“河童の川流れ”“猿も木から落ちる”(2)なら“踏んだり蹴ったり”、弱り目に祟り目“などがありますね。

土屋康太の答え

- (1) 弘法の川流れ

教師のコメント

シュールな光景ですね。

神崎直人の答え

- (2) 泣きつ面蹴ったり

教師のコメント

あなたは鬼ですか。

吉井明久の答え

(1) 科学者の実験失敗

(2) 僕」

教師のコメント

堂々と不幸の象徴として名を上げるとは思いませんでした。

「FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う!!」

突然の雄二の提案に一瞬場は静かになるが、一気に非難の嵐が巻き起こる。

「勝てるわけがない!」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ!」

「姫路さんが居たら何もいらない!」

うう、うるせえ。ここまでうるさいとはおもはなかった。雄二、早く治めろよ。俺の心の声に反応するかのように雄二は不敵な笑みを浮かべながら言い放つ。

「お前ら、静かにしろ。俺が何の考えもなしにこんなことを提案すると思っっているのか」

「思っっ」

「よし、明久。お前とはあとでじっくり話すから、静かにしてろ」
吉井の思わぬ返事にも動ずることなく雄二は切り返す。他の奴らは疑惑も目で雄二に注目していた。

「いいか? このクラスにはAクラスに勝つことが出来る戦力がいる。今からそれを証明してやる」

そう言っていると雄二は姫路の方に注目する。

「土屋、畳に顔つけて姫路のスカートを覗いてないでこっちに来い」
「……………！！（ブンブン！）」

「はっ、はわ！？」

必死になって顔と手を左右に振る否定のポーズをする土屋。あそこまで堂々と覗くのもある意味驚嘆に値するが、俺はいつかアイツが捕まるではないかと心配している。土屋は雄二に言われたとおり雄二がいる教壇の方に向かう。……畳の後をさすりながら。

「土屋康太。こいつがあ有名な寡黙なる性識者（ムツツリーニ）だ」

「……………！！（ブンブン！）」

やっぱりばらすか、雄二は。土屋康太という名前は知られていないが、ムツツリーニという名前は別だ。その名は男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑を以て挙げられる。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力をよく知っているはずだ」

「えっ？ わ、私ですかっ？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

雄二の言うとおり、試召戦争をやるなら、姫路さんはFクラス最大の戦力になるはずだ。

「ああ。彼女さえいれば何もいらないな」

と言うか、さっきから姫路さんに妙なラブコール送っている奴いるぞ。

「木下秀吉だっている」

秀吉は学力では名前を聞かないが、演劇部のホープで名が通っている。他にも双子の姉の事など。

「おお……………！！」

「ああ。アイツ確か、木下優子の」

「当然俺も全力を尽くす」

「確かになんだかやってくれそうな奴だ」

「坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか」

「実力はAクラスレベルが三人もいるってことだよな？」

「気がつけば、クラスの士気はどんどん上がっていた。」

「それに、神崎直人だっている！」

シーン……………

そして下がった。

「ちよつと待て、雄二！ どうしてそこで俺の名前を呼ぶんだ！ 全くそんな必要はないよな！」

俺は心外だ、ばかりに雄二に抗議するが、肝心の雄二はどこ吹く風だ。

「誰だよ、神崎直人って」

「聞いた事ないぞ」

「ホラ見ろ！ せっかく上がりかけてた士気に翳りが見せているじゃないか！ 俺は雄二たちと違って普通の人間なんだから、普通の扱いを……ってなんで俺を睨む！？ 士気が下がったのは俺のせいじゃねーだろ！」

何故そこで俺の名前を挙げる！？ そこは吉井明久だろ！？ 原作と違い、本来吉井のポジションに俺が入りつつあることに危機感を覚えながら俺は言う。だが、雄二は俺の話を聞かず、言った根拠を言い始めた。

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは>観察処分者くだ」

「いいやがった、こいつ！」

「……それって、馬鹿の代名詞じゃなかったっけ？」

クラスの誰かが見当違いのことを言う。俺はそれを否定する。

「ち、違う！ ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で……！」

「そうだ、バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

この野郎！ 俺に変わって話を進めるんじゃないやねえ！！

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路さんは知らないらしく雄二に尋ねる。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事などの類の雑用を、特例として物に触れられるようになった召喚獣でこなすといった具合だ」雄二がそう解説する。召喚獣は本来は召喚獣以外の物に触れる事ができない。最も学園の床には特殊な処理が施されて、立つことはできるらしい。

しかし、俺の召喚獣は別だ。雄二の言うとおり、物に触れられる特別仕様なのだ。最も物理干渉能力のある召喚獣は召喚獣の負担の何割かは召喚獣の召喚者にフィードバックされるが。

「おいおい、観察処分者 ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいって事だろ？」

「だよな、それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことだよな」

俺以外にも知ってる奴がいるらしい。

「気にするな。どうせいてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二？ そこは、俺をフォローする台詞を言うべきだよな？」

時々思う。俺は本当にこいつと悪友なのだろうか。

「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服しようと思う」

俺の抗議は大胆に無視された。

「皆、この境遇は大いに不満だろ？」

「当然だ！！」

雄二の言葉に触発され、クラス中が大いに盛り上がる。姫路さんもその雰囲気には乗されたのか、小さく拳を作り掲げていた。

「直人にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役

を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよな？」
宣戦布告の使者などやりたくない。俺は雄二の言葉に疑問を投げかける。

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ
て行ってみろ」

「本当か？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

雄二が自信満々に答える。もしかしたら原作の改変があるように、
酷い目に遭うこともないかも知れない。それなら……

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似をしない」

雄二は力強く、俺を信じろと言う。そこまで言うなら……。

「わかった。それなら使者は俺がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

俺はクラスメイトの拍手と歓声を背に宣戦布告の使者としてDクラ
スへと向かった。

雄二side

さすが直人。簡単に騙されやがる。俺は今後の直人のポジションを
考えながら、内心笑っていた。

「人が悪いねえ、坂下君も」

「坂本だ、明久」

考え事をしていたら、明久がいつものペースで俺に話しかけてきた。
珍しいな、こいつから話しかけてくるなんて。

「何のようだ？ 明久」

「雄一君の企みに参加してあげようかなって思ってたね」

「お前が？ あと雄二な」

確かにこいつが参加してくれるなら相当助かるが、何の対価もなしにこいつが協力してくれるとは思えない。

「……何が目的だ？」

「べつにいゝ？ いつも通りデータ採取するだけだよ？」

気の抜けた笑みを浮かべながら明久は返事をする。そっか、試召戦争が起これば、こいつの実験と研究がはかどると言うことか。そう考えれば少し得したな。取引をしてこいつを引っ張り出さなくてもいいしな。

「わかった。回復試験をちゃんと受けるよ？」

「あゝいゝ」

俺の回答に満足したのか明久は自分の席に帰っていった。俺は最初に考えていた試召戦争の作戦を変更する必要があるなと思い、作戦を練り直すことにした。まあ、今はとりあえず、

「騙されたあ！！」

ボロボロになって帰ってきた馬鹿をけなすでしょう。

第5話：戦力分析（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみ。

第6話：僕もかえろ、おうちに帰ろう、でんでんでんぐりかえして、バイバ

Dクラス戦は省略します。神崎君は原作明久と同じ扱いとさせていただきます。

それではどうぞ。

第6話：僕もかえろ、おうちに帰ろう♪ でんでんでんぐりかえして、バイバ

「それでは回復試験を始めてください」

高橋先生の言葉と共に姫路は真剣に、明久はマイペースに、二人は異なるスピードで問題を解き始めた。

Fクラスは宣戦布告をした後、昼食を取り、午後からDクラス相手に試召戦争を始めていた。この二人は振り分け試験の時に姫路は途中退席、明久は意味不明な回答をしたため回復試験を受けて点数を回復していた。他の人たちは戦争真っ直中である。

姫路は問題の選別をして少しでも早く、多くの問題を解いていく。そんな中ちらりと明久を見る。彼は最初と変わらず笑顔を崩さずマイペースに、ゆっくりと解いていた。あまり明久を見ていたらカンニング扱いにされてしまうので、視線を問題に戻して問題を解き始める。姫路はある程度問題を解いた後、高橋先生に採点を申し出る。高橋先生はそれを受理し、尋常ではないスピードで採点していく。

「採点、終わりました」

「はい、ありがとうございます」

採点が終わると同時に教室を出て、前もって指示されていた位置に向かう。いまだ回復試験を受けている明久を置いて。

『Dクラス代表、戦死。よって、Fクラスの勝利です。繰り返します……』

代表戦死の放送が掛かり試召戦争が終わった。

「あゝあ。終わっちゃった」

特に残念がる様子もなく明久は問題を解くのをやめた。試召戦争中ずっと回復試験の監督をしていた高橋先生は彼を見て呆れる。

「どの口でそれを言うんですか。ずっと問題を解いていた吉井君」
「いいじゃないですか」 勝てたんですし」

高橋先生の言葉になんでもない様子で答える明久。
そうなのである。明久はDクラスとの試召戦争中、ずっと回復試験を受けていたのである。普通なら姫路のようにある程度解いたら戦線に向かうのだが、彼はそんなことをするわけでもなく、全教科の回復試験を受けていた。問題が難しかったのか、それとも戦争に出るのが面倒くさかったのか、はたまた別の目的があったのか。高橋先生はそれを知ることはない。だって彼、吉井明久は誰よりも奇知外で何を考えているのかわからない人間だからだ。
明久は用は済んだとばかりに教室を出る。高橋先生は明久のテストの採点に取りかかった。

「明久」

「うん？ なんだい？ 坂下君」

教室に置いていたパソコンを立ち上げて、今日の試召戦争のデータ採取を終わらせて帰ろうとしたときに雄二が明久に声を掛けた。

「坂本な。今日の出来はどうだった？」

「まずまずかな」 問題は難しくなかったし」

「そうか。じゃあ明日から戦争に出ても大丈夫だな？」

「うん、いいとおもうよ」

雄二は名前を訂正した後今日の回復試験の出来を聞いた。明久はそこまで難しくなく、明日には出られると答えた。ずっと回復試験を受けていたことに対するお咎めはないらしい。

「出るからには派手にやっても良いが……やり過ぎるなよ？」

「やだ」

「だと思った……」

雄二は注意をするが明久はやだと明確に拒否する。それを予想通りの返事だと雄二はため息をついた。

「……全滅だけはやめろよ？」

「いいよ」

これ以上明日のことで注意を促しても無駄だと思った雄二は最悪の結末だけはやめてくれと頼んだ。それに対して明久は肯定の返事を返して、ちゃっちゃと帰っていった。雄二はやっぱアイツに協力を促すのはやめるべきだったかと少し後悔していたが、これ以上考えても仕方がないと自分も家路についた。

「ただいまあ」

「お帰りなさいませ、明久様」

「うん」

家に帰った明久を出迎えたのは一人のメイドであった。明久はそのメイドに荷物を預けるとそのメイドと一緒に書斎に向かう。

さて、ここで明久の住居の話をしよう。明久の住居は3LDKのマンションではなく、少し古い二階建ての大きな洋風の館である。庭もそれなりに広く、部屋の数も多い。例えるなら某弾幕シューティングゲームの紅い館より少し庭が狭く、窓が少し多いぐらいだ。無論メイドと執事もおり、それぞれ館の掃除、洗濯、食事など家事全般をやっている。明久が特に信頼している者たちにはある管理をさせているのだが……また後ほど。彼らは外部から通うものもいれば住み込みで働く者もいる。大抵は住み込みで働くのだが。そしてこの館の主人は先ほど帰ってきた高校生、吉井明久である。明久は自分の実験に最適な場所はないかと探した結果、この館が丁度良かったので館を買って住んでいる。とある事情によって、明久はお金に困らなくなったのだが、逆に支出より収入が大幅に上がったためメ

イドや執事を雇って消費している。

長々と説明したが要は主人は明久で、それに付随してメイドや執事がおり、大きな館で日々を過ごしているのである。

話を本筋に戻そう。明久は先ほどのメイドを連れて書斎に引きこもり、パソコンのデータを家のサーバーに移していた。

「今日はどうか？」

「ん？　まずまずといった感じかな？」

メイドは明久に今日の学校生活はどうでしたかと尋ねる。明久はいつもと変わらないといった感じで答えた。

「何か変わったこと無かった？　桜？」

桜と呼ばれたメイドは懷より手紙と書類を数枚取り出して、明久が作業している机に邪魔にならないように置いた。明久はそれを手にとつて、見てみる。

「本日は世界各国より技術要請と口座に金の振り込みがありました」

「また？　国の偉い人は何を考えているのかな？」

「恐らく明久様の技術と知識を捨て置けず、自分の手元に置きたいのでしよう」

今日あった出来事を明久に報告すると明久はまた？とうんざりとした表情になった。桜は推測で、いやほぼ確実にといった具合に返事を返す。

「捨てて」

「かしこまりました」

明久は受け取った手紙や書類を見ることがなく、桜に投げた。桜はそれらを受け取り全部火が付いている暖炉の中に投げ捨てた。投げられた手紙や書類がどんどん燃えていく。

「それと明久様。検体No.32が死にました」

「そ。じゃあ、死亡と書いておいて」

「かしこまりました」

桜が実験で使っていた検体が死んだというが、明久は特に気にするわけもなく返事を返した。

コンコン！

不意にドアからノックする音が聞こえた。

「明久様。夕食の準備が出来ました」

「はいはい。すぐに向かいます」

執事が夕食の準備が出来たと呼びに来て、明久は作業を中断して夕食に向かう。桜もそれについていった。パソコンをつけっぱなしにして。

そのパソコンにはこう書いていた。

『試験召喚獣システムを使った人体実験結果』と……

第6話：僕もかえろ、おうちに帰ろっ、でんでんでんぐりかえして、バイバ

どうでしたか？

ぜひとも感想、意見をお待ちしております。

第7話・うんゝ（前書き）

うんゝ。

第7話：うん」

神崎 side

翌日、Fクラスでは午前中補充試験を受けて、昼休みをはさみ、Bクラスとの試召戦争に望もうとしていた。教壇に雄二が上がつて全員に指示を出しながら檄を飛ばす。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、やる気は十分か？」

『おおー！！』

このクラスはやる気は十分らしい。まあ、さっきまでテスト潰けだったから溜まりに溜まった鬱憤を晴らしたいのだろう。そう考える俺だが俺もその一人だ。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開始直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおー！！』

今回の戦いの重要点をわかりやすく雄二が言い、全員が大きく返事を返すが恐らく半分はノリで返事しているだろう。

「そこで前線部隊は姫路瑞希に指揮を執ってもらう。野郎共、きちり死んでこい！」

いや、死んじゃだめだろう。

「が、頑張ります！」

姫路さんが引き気味ではないか。どうするのだ雄二。

『うおおー！！！！』

男の下心に火が付いて一際大きい声が上がる。……やっぱりこれがFクラスだな。

Fクラス男子の雄叫びが静まったところで昼休み終了のチャイムが鳴り響き、俺たちは一斉に教室を飛び出した。飛び出して渡り廊下にさしかかった辺りでBクラスと遭遇した。

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

奴らめ……余裕綽々と言った表情でゆっくりと歩きながら来てやがる……。

舐めるなよ！！

『生かして帰すな——！！！！！！』

誰が言ったかは分からないが、その叫びを皮切りにBクラス戦が始まった。

総合点数

野中長男 1943点 B VS 近藤吉宗 764点 F

数学

金田一祐子 159点 B VS 武藤啓太 69点 F

物理

里井真由子 152点 B VS 君島博 77点 F

くそっ！ さすがはBクラス！ 点数だけは高い！
早くも劣勢になり始めたFクラスを見て、俺は何とかフォローに入る。

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

よし！ 姫路さんがやってきた。これで形成が逆転する！

「来たぞ！ 姫路瑞希だ！」

Bクラスの誰かが声を上げる。やはり姫路さんを警戒していたのか。

「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど……」

「は、はい。行って、きます」

姫路さんはそのまま戦場に入ってしまった。その途端、勝負を挑まれる。だが、

数学

姫路瑞希 4 1 2 点 F VS 岩下律子&菊入真由美 1 8 9 点
& 1 5 1 点 B

点数差と腕輪能力であつという間に蹴散らした。すごいな、姫路さんは。俺も負けてたまるか！俺も意気込んで前に出ようとすると、

「わあゝ」すごいねゝ、姫路さんは」

後ろから独特の雰囲気を持ち、語尾に音符マークでも付けていそうな声がした。振り向いて見るとそこには、

吉井明久がいた。

「吉井……お前、闘えるのか？」

いきなりの登場に俺は驚きながら吉井に聞いていた。

「あたりまえじゃないか」だからここにいるんだよ？神崎君」

吉井は当たり前と言った具合に返事をする。なんだろうか、凄く、嫌な予感がする。奴は戦場になつてゐる召喚フィールドに入ると召喚獣を召喚した。

「サゝモゝン」

召喚された召喚獣は俺以外に気づいてゐない。俺はてっきり科学者のような感じかと思いきや、こゝろ、あれだ。魔法少女リリカルなのはのシグナムのバリアジャケットのような感じだった。ただ、色は赤やピンクでは無く青と黒を基調にし、武器は剣ではなく杖だ。

数学

吉井明久 1 8 5 2 点 F

「なっ!？」

俺は余りにも高い点数に驚いていた。一科目でBクラスの総合点数並みだった。さらに驚くべきことが起こった。

ふわぁ

召喚獣が……浮き始めた……。ありえねえ……。

俺はもう言葉を失うしかなかった。俺が驚くそばで吉井はいつもの笑顔を浮かべて言い放つ。

「腕輪はつどぅう」

召喚獣の腕輪能力を発動させた。だが何も起こらない。

瞬間、

ドゴッ!

野中長男 戦死

「えっ?」

Bクラスの一人が戦死した。いや、一人ではない。

ドガッ! ドゴッ!

どんどんBクラスの人間が戦死していく。よく見てみると石が赤くまるで隕石のように落ちていた。例えるなら流星群。それがBクラスを中心に落ちてきていた。

「……何だかわからないけど、す」

バキッ!

「……えっ?」

どんどん戦死していくBクラスの召喚獣を見て俺は素直に凄いと云おうとした瞬間、Bクラスの一人に、召喚者に隕石が直撃した。

全員、あまりのことに啞然として止まってしまった。

……うそだろ？ 召喚獣の攻撃が当たっている？

おかしい。召喚獣の攻撃は観察処分者でも無い限り現実には干渉することは不可能だ。なのに、当たった。どうしてだ……？ 一人考え事をしていたら、

ゴシャ！

君島博 戦死

Fクラスにも当たり始めた。

……うそだろ？ 俺はいやが応にも分かってしまった。

吉井明久は自分以外に攻撃を当てている。

「……くそっ！」

俺は急いで姫路さんの所に向かい、姫路さんの召喚獣と庇った。庇う中、周りからの悲鳴が止まなかった。

「わぁー！ すごい！」

しばらくして攻撃が止むと吉井が楽しそうな声を出すのが聞こえた。俺はその声と同時に立ち上がる。

「すみません、神崎君」

「いや、いいよ。気にしないで」

姫路さんがお礼を言いながら遅れて立ち上がる。俺は周辺を見渡してみた。

そこはさっきまでの廊下と違い、ボロボロになっていて数名の生徒が倒れていた。この光景を見て俺は愕然とした。姫路さんも口元を押さえて「ひどい……」と呟いていた。まるで戦場跡だ……。近くには無事だったFクラス数名と秀吉に島田がいた。

俺はこの光景を見て、怒りを滾らせた。そしてこの怒りを向けるべき相手も分かっている。一人楽しそうに戦場を歩く吉井を見て、俺は近づいて胸倉を掴んで睨みつけた。吉井は特に表情を変えることなく笑顔でいる。

「おや」 どうしたんだい、神崎君」

「……こうなるとわかってやったのか」

終止笑顔のこいつが憎くてたまらない。なんでそんなに笑顔でいられるのかわからない。俺はさらに睨みつける。周りもこいつを睨みつけている。

「わからなかったよ？」

「わからないからって試すことかよ!？」

こいつ分かってないのか!? 自分が何をしたのか!?

「当たり前じゃないか」 これは実験だもん」

「実験って……俺たちはモルモットか!？」

「うん」

ッ!!

バキッ!!

余りにもふざけたことを言った吉井を俺は殴り飛ばした。吉井は地面にたたきつけられて動かない。普通なら心配するが、こいつのことはもうどうでもいい! 俺は他のみんなを連れて回復試験を受け

に戻った。吉井をそのまま放置して。

雄二 side

やられたな……。

教室の惨状を見て俺は頭を掻いていた。

教室は卓袱台と文房具が壊されていてすぐには回復試験が受けられない状態だった。地味だが効果的だ。まあ、大丈夫だろう。姫路に明久がいるから火力は充分。教室には押し込めることができるだろう。俺は考えを切り替えて明日のことを考えることにした。

「おい、これじゃあ回復試験を受けられないじゃないか」

「どうでしょう……」

そこに直人達が戻ってきた。案外早いな……もう押し込んできたのか？

「早いな、Bクラスの奴ら教室に押し込んできたのか？」

「それどころじゃないわよ、全く」

「うん？ どうした？」

俺の予想とは違う答えが返ってきて疑問に思った俺は事情を聞いてみることにした。そしたら明久が敵味方関係なくほぼ全滅させて、それを実験と言いつつ切ったようだ。俺は納得すると同時にため息をついた。あいつは……

「で、あいつはどうした？」

恐らく一緒に来ているだろうと思えば俺は直人に話しかけた。だが……

「知らねえーよ、あんな奴。殴っておいてきた」

それを聞いた瞬間、俺は背筋から血の気が引いた。なんだって……？

「アイツを放置してきたのか！？」

「そうだよ！ あんな奴知るか！」

「バカ野郎！ 何でそんなことしやがった……！」

俺は直人を怒鳴った。周りの奴らは何が何だか分からない顔をして

いるがそんなことどうでも良い！ あいつを一人で放置だと！？
くそっ！

「本隊！ 俺に続け！！」

俺は本隊を連れて明久の回収に向かった。

くそっ！ 間に合え！

俺は焦る心を抑えつつ、急いで渡り廊下に向かった。

アイツが何かやらかす前に止めなくては！！

第7話：うん♪（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第8話：赤い……あかい……（前書き）

今回は明久の歪みの一端を見せます。
そして今までで一番短いです。

では、どうぞ。

第8話：赤い……あかい……

廊下side

Fクラス全員が教室に戻っていった後、残されたのは地面に倒れ伏している吉井明久と戦死者を補習室に連れて行こうとしに来た西村先生のみだった。西村先生は先ほどの一部始終を見ていたため、吉井に少し説教しようと思った。

「吉井、さすがに今のはお前が悪い。目の前にいるのはお前のモルモットではない。人間なんだぞ」

「……………」

顔を上げ口元をぬぐう明久に説教を始める西村先生。端から見れば説教する教師とそれを受ける生徒だ。少なくとも西村先生はそう思っている。

「お前がしたことはな……………」

「うん？」

説教を続ける西村先生だったが、急に呟く明久に何かあるのかと思いい、明久の方を見る。見るとそこには、

「赤い……血があかい……………」

口を切って出血した血を見て、高揚した表情の明久がいた。

ゾクッ！

それを見た西村先生は背筋がゾツとした。明久が自分の血を見て子供のように喜んでいたのだ。その光景が異様すぎて言葉が出ない。

明久は今気づいたかのように西村先生を見ると立ち上がって、血をぬぐった手を西村先生に見せた。

「見てください、鉄村先生！ 血です。赤い血が出ました！」

小さい子供が新しい発見をしたかのように喜ぶ明久。だが西村先生はその様子が理解できなくて、咄嗟に別の質問をした。

「な、殴られて痛くないのかお前は」

「痛い？ そりゃ、痛いですよ。何当たり前のことを言っているんですか？」

何言っているのこいつといった具合に切り返す明久。西村先生は少し安心する。吉井にもまともな感覚が残っているのだと。だが次の瞬間、理解不能な答えが返ってきた。

「でも、それも喜ぶことですよ？」

「喜ぶこと……？」

「はい！ だつて……」

のちに西村先生はこう語る。

聞かなければ良かったと。

「痛みは愛情表現なんですから♪」

満面の笑顔で明久は言い放った。その言葉に西村先生は言葉を失う。それと同時に理解する。

こいつは本当に『痛み』を『愛』と思い、感じている。

ただの殴られて感じたり、悦んだりする変態ではない。本当に痛みを愛として感じているのだ。

西村先生はもはや明久のことを理解するのを放棄した。

一年の時はここまでわかりやすく一般人としての歪みを見せる素振りも、雰囲気も醸し出さなかった。せいぜい普通の生徒とは違い、研究熱心な生徒で何を考えているのか分からない程度だった。それがいきなりの豹変、いやこれが素、なのだろうか。どっちかは分からないがこんな生徒は今まで見たことがなかったし、こんなに狂っていると思わせる光景も見たことが無かった。

西村先生はただ、ただ、立ちつくすのみだった。

明久 side

急に反応しなくなった鉄村先生。どうしたのだろうか？

まあ、いいや。どうでもいいし。

僕はまだ口から出る血を採血して、Bクラスに向かおうとした。

「明久、止まれ！！」

急に声を掛けられて振り向くとそこには坂下君率いるFクラス本隊がいた。

「おや、坂下君」 どうしたんだい？

「坂本だ。良かった、お前を回収できて……」

おやおや、心配性だね、坂下君は。僕に迫いついて心底安堵した表情の坂下君。人気者は辛いよ。坂下君は周りの惨状を見て一言。

「……よくこれだけの被害でやめたな」

「必要なデータを取るには形は留めておきたいからね」 それよりどうしたの？ そんなに慌てて」

「お前が先行して俺の作戦を無茶苦茶にされたら困るからな。止めに来たんだよ」

戻るぞと一声かけられて教室に戻っていく坂下君とその他。僕も戻ろっかなっと思いい、教室に向かった。

第8話：赤い……あかい……（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6047x/>

バカとイレギュラーと奇知外

2011年11月23日21時55分発行